

滝沢陽一先生を偲ぶ

本年2月23日恩師、滝沢陽一先生が召天された。96歳のお誕生日（2月2日）には「神についていかに語りうるか」という490頁の本を読み始められていました。最後まで真に伝道者であられた先生でした。60年の長きに渡り、私を導いてくださり、私の情報の70%は滝沢先生から頂いたものです。思い出は沢山ありすぎ、尽きませんが謝辞に述べたことの幾つかを詳しく記し偲びつつ深い学びへと導いて頂こうと思います。

滝沢陽一先生とのイスラエルへの旅

先生とイスラエルには2度旅をしました。いずれもインパクトのある深く記憶に刻まれるものでした。

第1回は1986年9月2日から8日でした。

8月29日テルアビブのホテルで客死した佐藤邦海元牧師の遺体を引き取ることが目的でした。佐藤先生は83歳で牧師を引退し、ヘブライ語を学ぶために8月22日に出国され、一週間後脳血栓で召天され、管理人に見送られてイスラエル国の法律によって手当がされていました。当時イスラエルには領事館があり、外務省が親族を捜したが見つからず、滝沢陽一先生に30日に電話が入りました。とにかく二人で行こうということになったのですが、出発には種々の問題があり、それらを瞬時に解決せねばなりませんでした。

一つはパスポートの問題、滝沢先生のは有効期限切れ、私のは前年2回もイスラエルの入国、その際にエジプトを経由していましたのでその記録が残っていました。二人ともイスラエルに容易に入国できるパスポートがありませんでした

外務省が特別の計らいで一回限りのパスポートを発行してくれるということになり、9月2日発行のパスポートで同日出国するという綱渡りの業に守られて出発できることができました。

次の問題は旅費です。成田ーパリーイスラエルで遺体を運ぶことが出来るエアラインはエアフランスのみであり、二人で196万円が必要となりました。未だ蓄えの十分でなく、どうしようかと悩んでいましたら、10日程前にダイナースクラブの会員カードを入手していたことを思い出して、事情を伝えると200万円迄利用してもいいということになり、初めてのクレジットカードの使用がこの大金でした。決裁は約2ヶ月後、戻ってから考えるということで無事に航空券を入手、ヘトヘトの状態で飛行機に乗り込みました。パリで一泊することになりシャンゼリゼ通りの安いホテルに泊まった訳ですが、その夜、10数軒先のホテルがテロで狙われ真っ黒焦げの焼け跡を間近に見て空港に向かいました。

1986年の中東情勢は急激に悪化する時で、4月にシリアでバス爆破事件で死者140名負傷者149名の惨事、翌日17日にはロンドン、ヒースロー空港でテルアビブ行きのエルアル航空機を爆破しようとしていた女性を逮捕、背後の男性が逮捕というように各種のテロ事件が発生していました。米軍機がリビア爆撃を始め、経済制裁が中東の火薬の火を付けようとしていた時期でした。

そのような状況下でのパリのシャルル・ドゴール空港の厳戒態勢、中でもテルアビブ行きは3時間前からチェックイン、空港の最先端のゲートの囲いに入れられ麻薬犬等に何度も接触させらるという検査を受け続け、緊張と行き詰まる雰囲気の中で出発を待ちました。ロッド空港に到着後はスムーズに出られ領事館の方に導かれて打ち合わせに入りました。亡くなられた現場に案内され、状況の説明を親切にしてくださいましたが、日陰に逃げ込みたいくらいの暑さに耐えなければなりませんでした。

翌4日遺体のあるワイズマン研究所に案内されました。それまで場所は知らされておらずどこかの病院の安置所かと想像していましたが、現地の看板をみて驚きました。出来ることならここで荼毘にふして欲しかったのですが、イスラエルにはその慣習はなく日本のような斎場ありません。炎天下に置かれていた遺体が遠くから見え、頭の形から佐藤牧師であることは判別できました。正面から顔で確認するのは滝沢先生、窓が開かれ、ひるむことなく確認されました。遺体は綺麗に処置されており、木箱に移され、頑丈に蓋がされ日本領事の封印が4カ所され、鄭重に布にくるまれ、空港へ。遺体は空港の端っこに置かれ、24時間爆発しないかどうかを調べるというルールが適応されることになりました。ここで帰りの飛行機を決められることになりエール・フランスでパリを経由して成田に着いたのが9月8日でした。到着後滝沢陽一先生は私にここからは自分一人で遺体と共に戻らるから君は一人で直ぐに帰宅しなさいと指示されました。疲れは私以上であったのに、成田から相模原まで遺体の側に付き添われたのです。寄り添うということはこのことなのだと実感しました。悲しい旅でしたが、私に気遣ってくださり、一日の休みを死海まで足を延ばし浮遊体験をさせてくださいました。この旅ではエルサレムに入る余裕はありませんでした。

後日談になりますが、200万円はどうなったか？実は佐藤牧師が遺体の引き取り最高額200円の特約が付いた旅行傷害保険契約をしてくださっており、2ヶ月後にカードが決裁されて私は事なきを得たという訳です。

瀬戸際で助けられるという私の人生脚本がここでも現れたのかも知れません。奇跡とはこういうことなのだと思います。

ロッド空港は1972年5月30日日本赤軍によるテルアビブ空港乱射事件を永久に記憶に留めるために事件発生の日付を示す大きな時計がかげられていました。現在名称はベングリオン国際空港となっています。昨年2月に訪問したときには記念の時計は見ることはありませんでした。いつから無くなったかは分かりませんでした。

第2回目の旅は1994年3月27日から4月8日でした。

この旅にはいろいろな目的がありました。

余談を先に記します。世界中の旅行会社は「聖地イスラエルの旅」と銘打って集客をします。イスラエルが聖地かということをめぐる暗黙の論争があります。私は度々この地に足を運んでいるために、予期しない不快な言葉を耳にすることがあります。今のエルサレムにはキリストが活動された時のものは何も無い。ガリラヤ湖にも無いとするのが通説です。それは私も理解しているのですが、光と闇が交錯する、平和を願うにもかかわらず戦火の種となっているこの国には惹き付けられるものがあります。

滝沢陽一先生はそれを否定されませんでした。むしろ、そのような先入観を捨てて、聖書の記述通り旅をするのは意味があるとさえ仰って励ましてくださいました。人間が造った歴史建造物は時の勢いによって作り変えられますが、自然の雰囲気や距離感はそれほど大きな変化はないと考えています。（毎年少しずつ変化するのも現地へ行けば分かります）イスラエルに関して滝沢陽一先生と私の考えは大きな違いはありませんでした。そこで私は一つのことを考え続けました。この考えが実現したのが第2回目の旅でした。

私の個人的な興味関心好奇心が前提ですが、この旅の至った経緯を整理します。

(1)坂村真民さんとの出会い

1988年仏教詩人で有名な坂村真民さんに会い、その詩を熟読し、直接お話を伺いました。最初のお話が仏教的なものでなく、ロマン・ロランの話で主に「ユニテ（一致）」であったのです。11月24日、日本創造教育研究所の開所式と詩碑除幕式でのお話です。

「南北に細長い自然豊かな日本に育った者が、これから21世紀をよくする為に何をなすべきか。私は若い人々に東の世界と西の世界の融和に励んでくれることを期待している。それは私が『二度とない人生だから』の中に願っているように、戦争のない世の実現に努力し、そういう詩を一篇でも多く作っていかうとしている私と共に歩むひとであり、そういう若い人々が一人での多く跡を継いでくれることを念じて、今日の除幕をした。この碑が永久にこの精神を伝え続けてくれることをとても嬉しくおもっている」

その後愛媛県砥部町の「たんぽぽ堂」と名づけられたお住まいを訪問し、お近づきになれば、1年後の1989年に私が関わったいた小田原愛児園に「念ずれば花ひらく」第125番碑の建立することになり小田原にお招きをしたことが契機となり、経理顧問として20年間のお付き合いになりました。（真民さん永眠2006年12月11日）

この間、真民さんは仏教伝道賞と数々の顕彰を受けられ有名になり、「念ずれば花ひらく」の碑が全国に建立されるようになりました。（国内に701基、海外に36基という驚くべき数字です）

(2)夢のような思いつきが実現する

1991年、最初の弟子の独立、最初の著作「わたしの幸せあなたの幸せ」の出版など、仕事も順調な波に乗り、イスラエルへの旅も重ねるなかで、平和を願う「念ずれば花ひらく」をエルサレムに建立できないかと夢のようなことを思いつき、佐藤牧師の遺体の日本への移送の時にお世話になった、幕屋の知人に話しを持ちかけました。1年半の交渉の結果こ

れが実現することになりました。小さな小さな民間人にはとても考えられないことですが用地の準備まで出来ていました。今度は碑を作ることが急がれました。ともかく碑は1993年12月27日神戸港を出港したのです。3ヶ月の船旅をして1994年3月28日エルサレムのヘブライ大学付属植物園に運び込まれました。(詳細は後記します)

碑の制作と並行して現地での据え付けを記念する式典を準備せねばなりません。私は滝沢陽一先生ご夫妻と静かにイスラエル旅行をしたいとの思いを長年持っていましたので、この機会に、滝沢陽一先生に団長を、お願いしてテマサトラベル社で一つのイスラエル旅行を企画してもらいました。4月3日がイースターでしたので無理なお願いになりましたが、当時先生は引退牧師でしたので快諾して頂き私の夢が実現しました。思いつきがみこころにかなったのかもしれませんが。

しかし、旅団の編成には苦勞しました。20名以上の参加を見込んでいましたが、直前の2月下旬、熱狂的なイスラエル人が、アラブの人々が礼拝中のモスクに向けて銃を乱射し多数の死者を出すというテロがあり、治安に不安な動きが一段と高まりました。多くのツアーが中止されることになり、私たちの計画した旅も実行があやふけになりましたが、12名の参加を頂き実現できました。参加された方の不安をのりこえる勇気と英断に敬意を表しました。ご家族にとっては狂気じみた参加決定であったのです。



(3)滝沢陽一先生の司式による除幕式

1994年3月31日、日本からの参加者に加えて現地の幕屋の方々と、現地でお世話して頂いたミヒヤエル・アビシャイさん始め多くのヘブライ大学付属植物園の関係者、高名な博士もおられました。そして、突然に日本大使館の大使夫人と職員の方が参列してくださいました。この詳細は1996年、平和を願う花の中の碑（念ずれば花ひらく第303番碑物語）として自費出版しましたのでここでは割愛します

(4)滝沢陽一先生ハルエ夫人と共にした旅

3月29日（火曜日）12時45分発エールフランスでパリへ、一泊

3月30日（水曜日）パリからテルアビブーエルサレムへ、四泊

3月31日（木曜日）午前除幕式、午後エルサレム見学(1)

4月01日（金曜日）エルサレム滞在、多くの場所を見学（2）

4月02日（土曜日）エインカレム（訪問教会）ベツレヘム（生誕教会）

訪問教会で礼拝を守る。司式説教滝沢陽一先生。ここでの礼拝は私の願いの一つでもあり、前もって滝沢先生にはお話していましたが、場所の確約はありませんでした。幸いにも、この時間帯は観光客が一人もなく、われわれの貸し切り状態になり、礼拝ができました。説教は「マリアの信仰」前掲書に内容が記されています。

4月03日（日曜日）早朝希望者で園の墓でのイースター礼拝に参加。その感想を滝沢陽一先生は個人誌「葡萄園第17号付録」にさせていただいておりますが、その一部を掲げます。

「園の墓は、まさに主イエスの時代そのままに露出した岩が、されこうべ(ゴルゴダ)に見える丘に、横に掘った墓があり、これこそ主イエスの墓とされる。全世界からの参加者千二百人収容のベンチを埋めつくす。静かな思いの中に、復活した今も、ここに、私たちと共に生きていましたまい、私たちを愛し、救ってくださる主に感謝の祈りをささげた。説教はロンドン、ウェストミンスター・チャペルのタッパー博士。主の復活の生ける力によって、墓を閉ざした石も除かれたように、私たちの人生におけるさまざまな困難も不安も、そして罪と死が除かれることを説く。讃美歌148番、二編190番ほか3曲がうたわれた聖句はマルコによる福音書16章1節—8節。聖金曜日(受苦日)と復活日を聖地で迎えたいというのがひそかな願いであったが、今回、小原兄の願いと共に実現し、これほどうれしいことはなく、感謝のほかはない。礼拝中からホテルに帰ってまで、妻の治枝は涙にくれていた。これまでの歩みの思いが、一度にこみあげたのであろうか」

その後、死海に南下し水浴、同じ道をもどりクムラン洞窟見学、北上してエリコを經由してガリラヤ湖へ（二泊）

4月04日（月曜日）ガリラヤ湖を船でティベリアへ、午後山上の垂訓教会にて第二回目の滝沢陽一先生による野外礼拝、聖書はマタイによる福音書6章25節から34節、まことの信仰とは何か？神がみ言葉によって、我々にあらわして下さったことを、全部、まこととする堅固な認識だけではなく、聖霊が福音によって、私たちの内に起こして下さる、心からの信頼です（ハイデルベルグ信仰問答書）

当日の説教記録の一部を記します

「今、私たちの頭上では鳥がにぎやかに啼き交わしています。この山から下る斜面には野の花が黄色く赤く咲きみだれています。空は青く、水清きガリラヤ湖面は輝いています。これと同じような日に。イエスは「空の鳥、野の花」を例にして、神に対する信頼の信仰を説いています。中略——まことの信仰とは知識だけではなく『心からの信頼』であります。今、鳥たちは神さまが養って下さることに心から信頼し、ひたすらに神への賛歌、互いへの愛をうたい、飛び交っています。野の花は紡ぎもしませんが、ソロモン王の衣服にもまさって着飾っています。私たちには思い悩みがあります。しかし、主イエスは「思い悩むな」と教えておられます。なぜならば、主イエスは信仰において、私たちと共におられ、共に歩まれ、さらに私たちの重荷を代わって負ってくださる救い主であるからです。後略」最後にこの時に、後に有名になる「足跡」（マーガレット・フィッシュバック）を読み上げてくれました。

滝沢陽一先生の声も時として涙声になられた感動あふるる山上の説教をお聞きすることができました。快晴の恵み、空の鳥、野の花、み言葉を実感しながら、丘の上から湖水まで

フォークダンスを踊りながら歌声たからかにタブハの教会までの美しい道を、楽しみました。

4月05日（火曜日）ティベリヤを後にカナの婚礼教会、ナザレの受胎告知教会を見学し地中海方向に向かいカルメル山（預言者エリアの像）、カイザリアの水道橋円形劇場、ヤフォーを通りテルアビブのホテルへ泊

4月06日（水曜日）午前3時半起床、ホテルから空港へ6時40分発のエアフランスでパリ乗換え、翌07日午前10時45分成田到着しました。

この旅は実に多くの人のご支援とお祈りに支えられての平和の象徴のような奇跡の連続とも言える日々でした。

私と家族を60年間導いてくださった滝沢陽一先生が召天された。ハルエ夫人は先立つこと6年、もはや私に心からの助言をしてくださる人はいなくなりました。このことが一番寂しいです。

